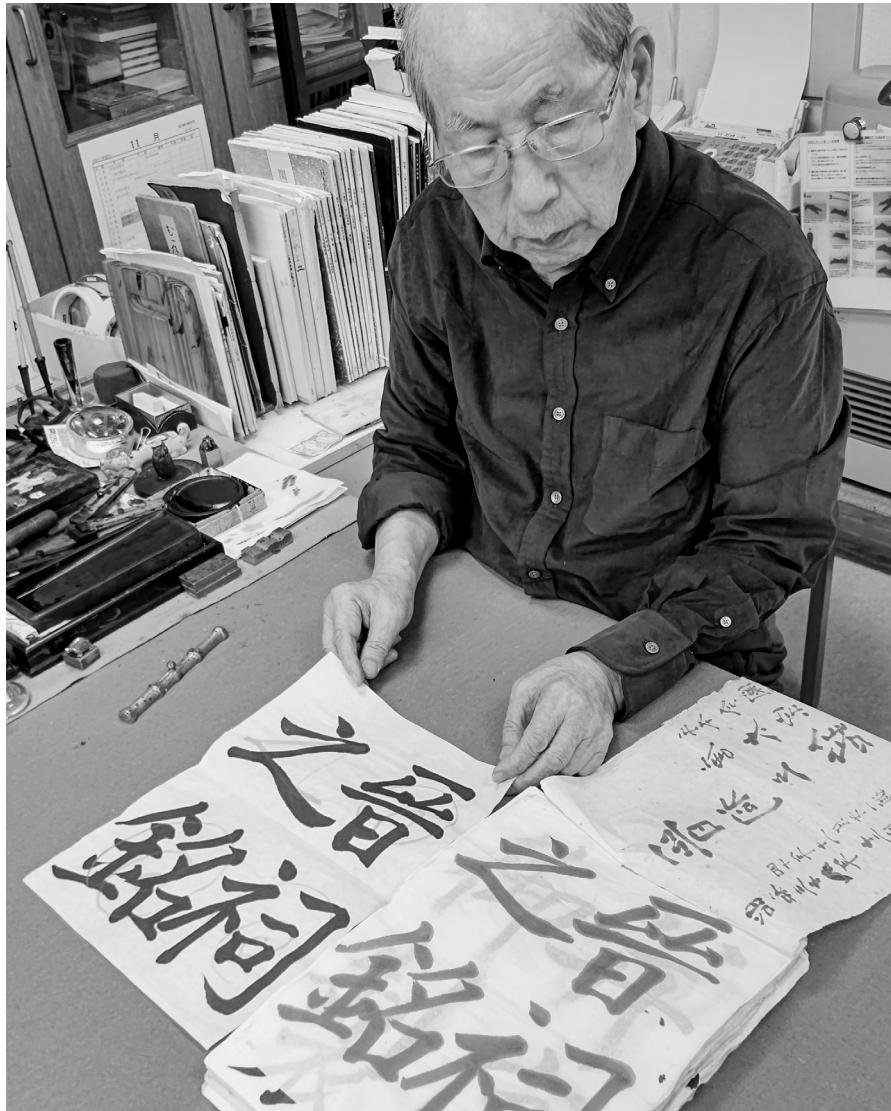


最終回

私の古典学習法

本誌審査委員 清水 透石

かな学書の基礎は古筆の拡大臨書から



古い話で恐縮ですが、私は昭和十八年に山梨の片田舎で、国民学校（昭和十六年国民学校令により小学校の呼称変更）に入学しました。

入学の時、親が揃えてくれた書道用具の硯は県内で産する「雨畠硯」で、葡萄とリスの彫りがしてあるものでした（図版1）。

書的環境には比較的恵まれていたのか、終戦後習字がなくなるまでは学校でも家でも筆を持つ機会は多かったように思います。その後学生時代は、まったく書とは縁のない、時に絵筆を持つ生活でした。

I 初めて学んだ古典の思い出

その後、教員となつて勤め始めると時々筆で書くことが必要になり、二十八歳の時に終生の師となる「今関脩竹先生」（日展評議員・大東文化大学教授）に師事することができました。



図版1 小学校入学時に親が揃えてくれた「雨烟硯」

その時、初めて習つたのが、唐太宗『晋祠銘』です。先生の手本は半紙からみ出すような大きさの四字、一回のお稽古は半紙一枚、月二回でした。保存されていた第一回目の手本が六頁の写真です。その時の手本を今見ると半紙の脇に「大きく暢々と」と添え書きされています。また別のメモには「太宗は、天下を統一し、常に意を政治に注ぎ、奢りを去り、賦を軽くし、刑を寛にした。大王（羲之）の書を玩賞し、自らも之を学んだ」と。先

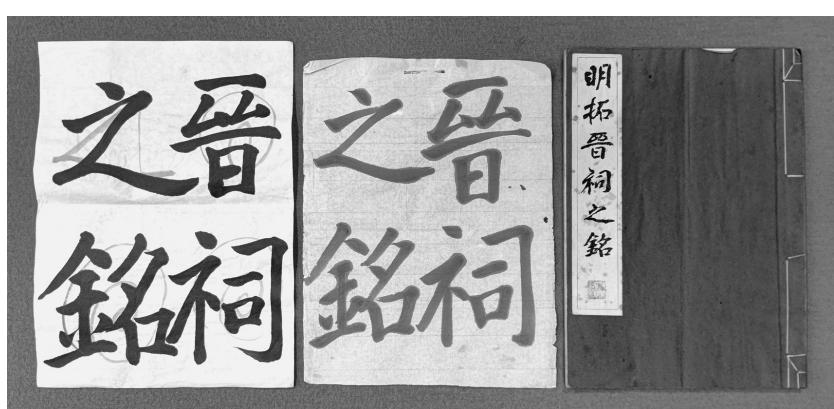
生がお手本としてこれを取り上げてくださった時のお話してあろうと思います。

この教訓は、指導者になつた今も受講者に

話すべき大切なことと心に決めています。

II その学書法は

初めて学んだ法帖は『明拓晋祠銘』（清雅堂）（図版2）でした。二年ほどはこの古典



図版2 初めて学んだ古典の法帖『明拓晋祠銘』

の臨書（先生の目を通しての半紙拡大臨書手本—初心者にはこの形式による学書法がよい）に没頭しました。

■プロフィール



清水 透石
(しみず・とうせき)

本名 治夫
(はるお)

〈略歴〉

昭和11年 山梨県生まれ

昭和34年 山梨大学卒業

昭和35年 東京都公立学校教員

昭和63年 早稲田大学教育学部書道非常勤講師兼任

平成元年 大東文化大学非常勤講師兼任

平成13年 大東文化大学教授退任

〔書歴〕

昭和38年 今関脩竹に師事

昭和46年 改組第3回日展初入選

昭和56年 讀賣書展大賞・内閣総理大臣賞受賞

昭和58年 第15回日展・昭和60年第17回日展特選

昭和62年 第19回日展委嘱

平成3年 第23回日展初審査員【以後5回】

〔現在〕

日展特別会員、読売書法会参事、全日本書道

連盟顧問、全国書美術振興会参事、日本書道

文化協会参与、日本書道ユネスコ登録推進協

議会委員、日本書道美術館理事、N H K 学園

生涯学習書道展審査員、仮名書道研究藍翁会

会長

著書

『仮名条幅入門』『仮名表現字典』『かな古典の学び方高野切第二種』（以上二玄社）、「かなの基礎」学書教本I・II』『楷書・行書の基礎学書教本』（以上藍翁会）

習い始めは手本の形のみを追い、平面的章法のみに目を奪われ、相称的な美を求める相称的な美は見えず、書の実線のみを見て、この書が持つ虚画の意味も眼には入らなかつたのです。「虚画が奏てる妙なる響き」など到底耳に入るものではありませんでした。

最近改めて臨書してみて、太宗の書の中に王羲之書法を窺いしることが少しばかりですが理解できるようになりました。今もって

なお、「王書の絶妙得意なる神氣冲和の妙をそこに見る」までには到底至つていません。

結局この境地は、初心に返つて繰り返し臨

書することにより感得できるのかもしれません。

この古典を学書の初めにお与えくださいません。あるいは永遠の課題かもしません。

今は亡き師の慧眼に心から感謝し、更に一步深めて学書すべき課題であろうと今は思っています。

二年余り『晋祠銘』の学書で楷書に近い行書を学び、次に学んだのは『元永本古今集』

と共に懷素『草書千字文（千金帖）』でした。当時の私は、特に日本書道史の知識もない頃であったので、それがどのような書的意義のある古典かも知らず、勤めの傍ら朝夕の臨

書を五年程、与えられた手本をまねることに没頭しました。後日思うに、これらはかな作品の制作に役立つことを意図してのものであることだと気づきました。今振り返ると、師匠がその時点での私の学書の状況を見て判断されたのだろうと思います。

これらの学習が今日の私の書作の骨格をなすものとなっています。

IV かな学習法は—拡大臨書で—

私は『元永本古今集』の原寸臨書ではなく、漢字の学書法と全く同じ、太筆で半紙二行六文字程度を拡大臨書という方法をお奨めしています（図版3）。



図版3 「拡大臨書」初心者にはこの学書法がよい

III かな学書における我が師の教え

この学習法については、後に出版された今関脩竹編著『書道技法講座 元永本古今集』

(二玄社)で次のように書かれています。

「かなのは基本練習は大字(半紙六文字程度)を漢字と同様に、手書きの和紙を用いるがよい」

また、他の書物でのインタビューにおいて「私は徹頭徹尾大字主義、かなは大字書法(拡大臨書)を奨めます」「書の生命は線にある。一本の筆であらゆる可能性の線が引けるよう鍛錬を」と述べています。

「拡大臨書」には今関先生の書学における二つの理念・哲学があつたと思います。

一つには、学書法の歴史に学ぶこと、漢字の学書法は初步から拡大臨書により、法帖からの運筆法を正確に把握することができる。

二つには、かな学書において初学での原寸臨書は、線の変化も見えず、表現にも限界がある。拡大臨書することにより、字母となる元の字を確認し、小字では表現しにくい微妙な線の変化も拡大する中で表現することが可能となる。

次に「一本の筆であらゆる可能性の線を引けるように鍛錬を」とは、運筆は直筆で遅速緩急を、そして筆圧の強弱を付け、己が理想とする線を表現できること。その線は「かな一字の中で、また数字連綿の中で」表現せよとのことです。

V 「元永本古今集」技法講座から

の姿勢こそ、生涯筆を持ち書作に励む者の学書の道であると思います。

今関先生は「学書を志す者へ」と、次の言葉を前記技法講座に記し、また機会あるごとに門人や学生に六項目にまとめて教えていました。

その六項目とは要約すると、
①運筆は懸腕直筆で、雄大に
(大きく書くほど理解しやすい)

②学んだことは反復練習して必ず覚える
(覚えられないほど多くはむさぼるな!)
③急ぐな 休むな
(急げば疲れ、休めば遅れる)
④書く前に線をよく見つめよ
(線が書の生命である)

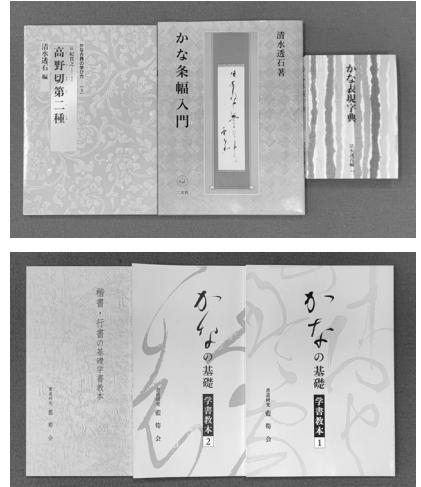
私の場合は学書への入門が遅かったこともあり、基本的な古筆を学ぶことなく『元永本古今集』の臨書から始めましたが、今思うと元永本は高度(個性的)な古筆でした。基本的な線を学ぶには、もっとわかり易く、初步を学ぶのに適した古筆があること、その練度により段階的に高度の運筆を要する古筆へと進めることがよいと私は思います。

VI 基本的な古筆から発展的古筆へ

私たち書を学び、書を芸術とする者は日々の営みの中で、常にこのような心構えで筆を持つこと、それは大変な努力を要することですが、この苦行を怠つてはなりません。こ

初めてかな書を学ぶーその前に
初めてかな書を学ぶ方は古筆の臨書以前に入門書として「かな・変体仮名」の単体を学び、「漢字の楷書行書」の基礎を学び、その後「かな書の入門」的な古筆へと進むのがよいと思います。

そのような観点から、私は初心者・門人・そして門人に教える補助教材として指導者のための基礎学書教本『かなの基礎 学書教本I・II』、『楷書・行書の基礎 学書教本』を



図版4 初心者向けの入門書を作成



図版5 (コロナ渦の中での合宿) 指導風景

『高野切第三種』は、字形が整い線もさわやかでわかり易いです。しかし、同一文字はすべて同一字形のため、やや単調になりがちです。この書体を長い間学ぶと、その書癖が身に付き、次の一步へ移るのに時を要します。

VIII 古筆学習の順序

古筆の学習では、学書の順序としては字形も正しく線條もわかり易い『高野切第三種』、高度ではあるが『寸松庵色紙』また『関戸本古今集』から始めるのがよいと思います。

作成しました（図版4）。

古筆臨書に入る前に、あるいはそれと併用して学書するのが効果的と思います。

『寸松庵色紙』は一点一画とも運筆が正確であり、どの一葉を見てもゆるがせにしたところが全く無い。①線の流れ②雄大な線の伸び③線から受ける気迫、など基礎を学ぶには最適です。

我が師匠、そして多くの先人も「寸松庵色紙は繰り返し臨書すること」を奨め、臨書の度に必ず新たな学びが得られる、生涯座右において学ぶべき大切な古筆であると述べています。私は現在も繰り返しこの古筆を臨書しています。

『関戸本古今集』は、寸松庵色紙と同系統と



筆者近影

も言われていますが、規矩にとらわれず自在に変化し、自由に運筆しています。完本ではないが、後半になると早書きの所も見え、寸松庵色紙より気楽に学べる古筆です。

これらの古筆で基礎を十分時間をかけて学んでから次の段階へ進みます。

基本ができたところで、新たな古筆臨書の醍醐味や自分の好みに合った個性を引き出す、そんな古筆があります。形の崩れた美を表現している平安末期の古筆です。それぞれ好みがあると思いますが、私にとってそれが『和泉式部続集切』であり、やや時代が下がつて『元永本古今集』などです。そして最近臨書

して楽しく、門人の指導にも使用している古筆に『重之集』があります。

今はただ長年臨書してきた古筆の中から、次世代の人々に「かな古筆の魅力、その技法」を日々伝えることに努めています。

かな書道を学んで早六十数年、多くの古筆を学んできましたが、自身の作品制作に、これまで学んだ古筆を基礎にして自由自在に表現したいと願い書作に取り組む日々です。

IX 若き書家に願いをこめて

日本の文化、その一翼を担う「書道」、私が学んできた「かな書道」は、万葉、古今の時代から長い歴史の中で育まれてきました。これから書道界を担う若い人々には更なる発展に努力していただきたい。その方法は過去の学書法（書の伝統）を振り返る中に新しい思考が生まれると思います。伝統を無視しての芸術は続いたためしがないからです。

今回、繰り返し「古筆の臨書を」と記してきましたが、単なる古筆の模倣では、伝統を受け継ぎ新たな発展などは望めません。深く過去を振り返り将来を見据えて書芸術の発展に努めていただきたいと願っています。